

# 社会福祉法人鞍手ゆたか福祉会のルーツ

社会福祉法人鞍手ゆたか福祉会

長谷川 正人

<目 次>

1. 福祉との出会い
2. 日本福祉大学での生活
3. 就職活動
4. 入所施設の指導員
5. 通所施設の建設候補地選び
6. 法人設立審査調書提出
7. 小規模作業所の開設
8. 鞍手ゆたかの里の開設

## 1. 福祉との出会い

高校2年のとき、ひょんなことで生徒会執行部に入ることになりました。僕はそこで、千々和君という友達に出会いました。彼は、文芸部に所属し詩を書いたりしていました。千々和君の影響で、僕は、図書室で何げなく詩集のコーナーを見ていました。そして、偶然手に取った本が、『車椅子の青春』という詩集でした。パラパラと立ち読みし、知らなかった世界が目の前に拡がりました。その詩の内容に大きな衝撃を受け、僕はその場で泣いてしまいました。

初めて聞く言葉「進行性筋ジストロフィ」（通称「筋ジス」）。生まれて成長していくにしたがって、徐々に身体中の筋肉が弱っていく病。最初は、元気に走り回っていたのに、走れなくなる。そして、次第に歩けなくなる。車椅子での生活が始まり、徐々に内臓の筋肉まで機能しなくなり、寝たきりの状態になり、死に至るという難病です。（今は、医学が進歩していると思うので、当時と違って、いろいろな治療法などが開発されて、状況は変わっているかも知れません。）

その病気を持っている人達自身がベッドの上で、病と闘いながら詩を書いています。自分は20歳ぐらいになると多分死ぬとわかっているのに、今を一生懸命に生きようとするはじけるような熱い思いが胸を打ちました。きっと、彼らに比べて、自分自身は、五体満足に生まれ、何不自由なく育ってきたのに、彼らほど熱く生きていない自分に、「オレって何やってんだろう?！」と問い返したのでしょうか。

彼らのために何かやりたい。そう思って、部室のドアをノックしたのが、「社会福祉研究部」です。そこで、「手話」や「点字」に出会い、「盲学校」や「知的障がい児施設」に遊びに行き、こうして福祉と出逢いました♪その年の文化祭で、生徒会執行部が、主催した模擬店で得た収益は、私の提案で、筋ジスの施設「ありのまま舎」に寄付をしました。

高校卒業後の進路を考える時期が来ました。父が技術屋で、機械設計をやっていた影響もあり、どちらかというと理数系の方が好きだった自分は高校では理系クラスにいました。大学は理工学部あたりに行こうと思っていました。でも、この経験をきっかけに、進路は迷わず、福祉大学に行きたいと思いました。当時は、今と違って、福祉系大学など全国にほとんどなく、名古屋の日本福祉大学と東京の日本社会事業大学ぐらいでした。自分は、そのどちらかに行きたいと思いました。それを聞いた両親や親戚一同は、「福祉は苦勞する」「貧乏する」と猛反対しました。でも、我が儘を押し切ってその2校を受験しました。残念ながら、受験は失敗しました。浪人し、予備校で、福祉を目指して勉強しました。そして1年後、無事、日本福祉大学に合格し、晴れて日福大生となりました。今、福祉の道を選んで、どうだったかと聞かれると、迷わず「良かった」と答えられます。でも、確かに、「苦勞」と「貧乏」は、人生の先輩方の言われたとおりかもしれません。

## 2. 日本福祉大学での生活

日本福祉大学（通称「につぶく」）での4年間は、僕の仕事の原点です。今は、愛知県知多郡美浜町にあり、広大な敷地に立派な校舎がそびえています。僕らの時代は、名古屋市昭和区の「いりなか」という場所にありました。学校の敷地の広さは、普通の中学校ぐらいの小さな大学。しかも、開学からすでに30年も経過しているので、建物はボロボロ。でも、日福大は、その歴史の中で、学生自治会と教授会と教職員組合との三者自治が確立しており、当時京都の立命館大学と並んで、日本の中で屈指の民主的の大学と評価されていました。日福の伝統は、「自由に学ぶこと」、「弱者の立場に立つこと」、「人を大切にすること」ではないかと思います。そんな環境で、4年間を過ごせたことは、本当に幸せだったと思います。僕は、その環境の中で、ゼミ、サークル、下宿生活を中心に生活しました。

ゼミは、1年次は、クラスで「男と女」というテーマを選び、「男は仕事・女は家庭」という考え方は是非かというような話を1年かけて議論しました。その中で、それまでの僕の「妻は家庭で夫の仕事の帰りを待つべき」など九州男兒的の男尊女卑的の考え方は、真反対に変わりました。2年次のゼミは、カール・マルクスの「経済学哲学手稿」の勉強をしました。3、4年次は、社会学の那須野隆一先生のゼミに所属し、社会教育論について学びました。卒業論文のテーマは、「東京中野区教育委員準公選制度について」でした。

サークルは、「島田一ツ山セツルメント」に所属し、名古屋市天白区の島田一ツ山という地域に毎週土日に行き、日曜日は、小学校3、4年生を対象に、「実践」と称して、公園に子どもたちを集めて、集団遊びをしました。毎週土曜日は家庭訪問（通称「かほう」）で、子どもたちの家に行き、子育ての悩みや地域の抱える問題などについてお母さんたちと話していました。平日は、「実践討論」（通称「じつとう」）を中心に行い、日曜日の実践をレポートにまとめ、集団に入れられない子への働きかけなどについてグループで意見交換をしていました。総括のポイントは、その子の課題を、社会の問題、学校教育の問題、地域教育力の問題などと関連づけてとらえるということでした。今考えると、おそらく未熟な短絡的な分析をしていたかもしれませんが、そういった観点を学べたことは、今の自分にとって、とても大きな意義があったと思います。セツルの学生は、「セツラー」と呼ばれており、私たちセツラーは、その過程で、分析力を高めたり、ものの見方考え方を学びました。また、年度末は、活動の総括をするために、民宿を1週間ぐらい借り切って、実践、大学活動、新入セツラーへの指導、学習調査活動、執行部活動などについて議論し、それを文章化し、総括文集を完成させます。この議論で、先輩セツラーから、厳しいツッコミを受け、様々なことを学びます。また、文章化では、先輩から赤ペンで細かく文章添削（通称「ぶんでん」）され、文章の書き方を学びます。

僕の大学生活は、まさに、セツルメントに始まり、セツルメントに終わった4年間だったような気がしま

す。本当に、多くの学びをいただきました。ちなみに、島田一ツ山セツルメントは、大学移転の数年後に残念ながらつぶれてしまいました。やはり美浜と名古屋は毎週土日に行くにはかなり遠い距離なのです。今、日福のセツルメントは、「ヤジエセツル」、「井戸田セツル」、「トロッコセツル」の3つとなりました。

下宿生活は、北海道出身の湯浅君と4年間一緒に暮らしました。湯浅君とは、ふすま越しで生活していました。会社の寮の間借りで、寮母のおばちゃんが朝晩のご飯を作ってくれていました。湯浅君とは、人生のこと、友情のこと、仕事のこと、福祉のこと、恋のこと、音楽のことなどなど、毎晩安酒を飲みながら、ホントにいろんなことを語り合いました。これも青春の最高の思い出です。彼は今、函館の病院のMSW（医療ケースワーカー）として、働いています。今年あたり20年ぶりに会いたいねと話しています。

### **3. 就職活動**

セツルとゼミに没頭した3年間を過ごし、4年になりいよいよ就職活動の時期になりました。僕は、大学時代、障がい者の人と接した経験はほとんどなく、教員免許所得のために知的障がい児養護学校で2週間教育実習をした程度でした。しかしその経験は、僕の進路を決定づけました。実習を通じて、僕は知的障がいの人達の純粋さややさしさの魅力のとりこになりました。それで僕は、養護学校の先生になろうと思い教員採用試験を受けました。がしかし、残念ながら通りませんでした。それで、知的障がい者の施設に就職しようと、秋から地元のあちこちの施設を見学したり実習したりしました。

そんな頃、田川市にちょうど僕の卒業する春に開設する施設から、日福大に求人案内が来ているのを見つけました。そこで、早速、その知的障がい者入所施設の採用面接を受けました。結果は、残念ながら不採用でした。でも、どうしても、新しくオープンするその施設を一から作り上げる苦楽を体験したいと思い、不採用通知を持って、理事長に直談判に行きました。「八幡から毎日3時間かけて通勤します。どうしてもこの施設で働きたいのです。きつこの施設のお役に立ちます。頑張りますので、どうか採用して下さい！」無我夢中で頼み込みました。その法人の事務長が日福大の3年先輩の方で、その方の後押しもあり、数日後、理事長名の「採用通知」が送られてきました。僕は、感激し、理事長とその先輩に心底感謝しました。そして、この施設を僕の力で日本一の施設にしようと心に誓いました♪

### **4. 入所施設の指導員**

晴れて施設の指導員になりました。入居者は50人、職員は24人の施設。今から20年前です。福祉施設自体、今よりも随分少なく、施設職員といっても、マイナーなイメージが強く、「自ら苦勞を背負って立つ物好きな人」と思われる時代でした。福祉系大学も全国に数えるほどしかなく、福祉系専門学校は、皆無の時代でした。当然、施設職員も、専門の勉強をした人など希有の存在でした。この施設も、僕と日福大の3年先輩の事務長以外は、全員福祉とは畑違いの人でした。

素人集団のこの施設を何とか押しも押されもしない立派な施設にしたいと思って最初に取り組んだのは、集団づくりと基礎的な勉強会でした。幸い新規開設施設ですので、先輩後輩がなく、年齢は違えども、経験では横一線のスタートです。職員の中では最も若い部類に入る23歳の僕ですが、何人かの有志と月1回の「勉強会」を立ち上げました。テキストは、福祉協会発行の『はじめて施設に働くあなたへ』（現在は絶版）で、福祉の基礎の基礎を勉強しました。また、僕は、全障研のサークルにも所属していたので、そちらから紹介された文献も学習しました。こうして少しずつ、障がい者の「シ」から理解できるようになりました。

また、現場では、土日の自由外出や、施設外作業（企業出向）の取り組みなども取り入れ、「できる限り管理のない生活」と「施設内で完結しない暮らし」を目指しました。僕の所属する作業班では、半年に1回総括文集を出しました。それを『月刊愛護』（現『A I G O』）の「実践報告」というコーナーに掲載されたこともありました。幸い、その施設は、自由闊達な雰囲気があり、僕も、水を得た魚のように、伸び伸びと自分のやりたいことを自由にやらせていただきました。何しろ、職員集団がとても仲が良く、明るい職場でした。職員は皆5年間をガムシャラに働きました。そして基礎ができました。また、「施設外実習に積極的に取り組んでいる施設」、「自由で明るい施設」と、社会的な評価も高まりました。目標をほぼ達成し、次の新たな目標を考えていた僕は、その頃、「あくまで、雇われの身ではやれることに限界がある」と気付きはじめていました。もっともっと進んだことをやるには、自分が施設の経営者になって自由に運営できる立場になるしかないと思うようになりました。僕は、自分で施設を作ろうと思いつき、施設の認可申請の準備を始めました。そして、7年勤めてこの施設を退職しました。日福大で福祉の基本を学び、この施設でその考え方を実践し、ゼロから試行錯誤で作上げた体験と自信が、今の自分の基礎になっています。

## **5. 通所施設の建設候補地選び**

施設の建設など、雲をつかむような話で果たして可能なのかを含めて、まず情報収集することから始めました。施設を開設した人に会って話を伺い、本を買って読みました。その結果、通所施設を作る場合のハードルは次のとおり。

- ① 600坪以上の土地を確保すること。
- ② 2000万円以上の自己資金を確保すること。
- ③ 建設地の地域の同意を得ること。
- ④ 政治家や地元の有力者などの応援があること。

「お金はない、信用もない、力もない」、ナイナイづくしの弱冠29歳の僕には、あまりに無謀な挑戦であることがわかりました。でも、他に道はないから駄目元でトライすることにしました。次に考えたことは、どこに施設を作るかです。判断基準は2つ。

- ① 都会は土地が高いから、土地の安い郡部で、なおかつ田舎ではない場所。
- ② 県の認可のとりやすさと、地域の既存の福祉団体とのトラブルを避けるために、未だに施設や作業所がひとつもない地域。

早速、福岡県の知的障がい者施設名簿と福岡県の白地図を調達して、白地図に既存の施設のある場所にマジックで印を付けていきました。すると、県内の市郡で、知的障がい者施設が皆無の場所は、県南地域の某郡と鞍手郡の2ヶ所だけということがわかりました。僕は、土地勘が多少はある鞍手郡を建設候補地のターゲットに決めました。

そこで鞍手郡についていろいろ調べてみると、郡内には何年も前から地道に活動しているいくつかの障がい者小規模作業所があることがわかりました。そんな地域に落下傘で、施設を作ることは、絶対にやってはならないことです。幸い、鞍手郡4町のうち、1町だけは、そういった活動が全くありませんでした。そこで僕は、その町、「鞍手町」で施設建設を目指すことにしました♪

## **6. 法人設立審査調書提出**

平成元（1989）年7月、初めて鞍手町を訪れました。目的はふたつ。ひとつは、地域住民運動として施設を建設するために、地域の手をつなぐ育成会と連携をとること。ふたつめは、来年5月末日までに「法人設立審査調書」を提出するために土地を確保し、地元の承諾を得ること。

早速、僕は、「鞍手町手をつなぐ育成会」（知的障がい者親の会）の会長さんにお伺いし、「利用者を主体とした施設を作りたい」「どんなに障害が重くても、希望する人は誰でも受け入れる施設を作りたい」と趣旨を話しました。すると、会長さんは大いに賛同して下さり、早速、総会の場を設定してくれることになりました。そこには、8名の保護者の方が、出席して下さいました。僕は、力を込めて、どんな施設を作りたいのか、夢を語りました。すると、保護者の方々は、「通所施設の建設は、みんなの願いでした。全面的に協力させていただきます。」「将来的には、親亡き後のために入所施設の建設を目指しましょう。」後に、この親の会が、施設建設のピンチを救ってくれることとなります。一方、僕は、鞍手町内を車で走り回り、施設建設用地探しを始めました。鞍手町内は、田舎なので土地はたくさんあるのですが、町内に知人もおらず何のツテもない自分としては、「売地」の看板を見つけることぐらいしか方法はありません。町中を走っていると、1件だけ「売地」を見つけました。450坪。ちょっと狭いけど、2階建てにすれば建たないことはない。値段は坪1.5万円と破格の安値。この土地で行こうと決めました。それで、その土地の地権者、地元の区長、組長、隣接地権者などにお会いし、趣旨を説明させていただきました。休みの度に、何度も地域に足を運び、たくさんの人に会ってお願いし、常会を開いていただいたり、説明会をさせていただいたりしました。平成元年7月から翌年の4月末まで10ヶ月間粘りましたが、結局、施設建設についての地元の同意は得られませんでした。

申請の締切日まであと1ヶ月しかなくなりました。親の会と対策を話し合い、町長に相談しようということになりました。5月6日（金）、鞍手町親の会数名と私とで、町長に面会に行きました。親の会の方々と僕は、これまでの経過を話し、「施設を建設したいのですが、どうしても地元の同意が得られません。書類提出期限は今月中です。時間がありません。何とか力を貸して下さい。」とわらをもつかむ思いでお願いしました。町長は、僕たちの話真剣に耳を傾けてくれました。週明けの5月9日（月）、町長から僕に直接電話がありました。「施設建設に良さそうな土地がありますが、現地を見に来ませんか？」というお話でした。僕は、興奮して、「行きます。是非、その土地を見たいです。」と言って電話を切りました。

翌日、親の会の会長と僕とで、8時半に町長室にお伺いしました。町有地で600坪、しかも県道沿いです。地価も、予算内でした。町長、助役と一緒に土地を見に行き、すぐに気に入りました。僕は即、「是非、この土地に施設を建てさせて下さい。」とお願いしました。すると、町長は、「それでは、今日の夜7時に公民館に来て下さい」とおっしゃいました。

公民館に行くと、約20名の人達が集まっていました。地元の人達と役場の人達です。役場からは、町長、助役、収入役、住民福祉課長、福祉係長、総務課長、管財係長などがずらりと並んでいました。そこで僕は、施設整備計画の概要説明などを行いました。すると、地元の方々から、「知的障がい者の人達は、迷惑をかけるのですか？」などの質問がいくつか出ました。僕は、ひとつひとつの質問に丁寧に答えましたが、地元の人達にとって、知的障がい者と言ってもどんな人達なのか、ほとんど知らないのが現状ですので、不安を取り除くことはできず、話し合いは決裂しそうな雰囲気になってきました。その時、町長が、「どうか皆さん、施設の建設に同意して下さい。何かあったら私がすべて責任を取ります。」と力強く言いました。その一言で、地元の人達は、「町長がそこまで言うのなら…」とついに同意して下さいました。福祉係長と管財係長は、すぐに、関係者に「施設建設同意書」を配り、その場で、区長、水利権者、隣接地権者の同意書への署名捺印が行われました。こうしてわずか数日のうちに土地問題が電撃的に解決しました。その土地が、現在の「鞍手ゆたかの里」の土地です。僕は、急ピッチで書類作成をして、どうにか平成2（1990）年5月末日、福岡

県に「法人設立審査調書」を提出することができました。

## **7. 小規模作業所の開設**

県に「法人設立審査調書」を提出すると、早速、7月上旬に「ヒヤリング（事情聴取）」への日程通知が来ました。ヒヤリングでは、県の担当者より、事業内容等についての質疑があり、修正点などについての指導を受けました。その後、9月上旬に、県より、「鞍手ゆたかの里を、平成3年度国県補助協議の対象とする」との通知がありました。当時は、県が協議対象にするということは、ほぼ間違いなく厚生省の内示をいただけるということでもあり、この時点で、施設の開設は確定となりました。そこで、施設で働きながらこれから施設開設業務を行っていくのは不可能に近く、また、施設がオープンする前に、無認可作業所を開設し実践の基盤を作っておきたいとの思いもあったので、平成3年3月で、施設を退職することにしました。

施設開設予定日は、平成4年4月。その1年前の平成3年4月に、施設開設地の近くにプレハブ小屋を借りて、小規模作業所「鞍手ゆたかの里」を開設しました。鞍手町に初めての障がい者作業所の開設ということで、新聞各紙も筑豊版で大きく取り上げてくれました。作業所の利用者は、3人から5人。職員は、僕ひとりで、作業所で紙粘土のブローチを作ったり、アルミ缶を回収してつぶしたり、キュウリやヘチマを植えて育てたり、散歩に行ったりして、1年間を過ごしました。毎月生協の朝市にバザーで手作り小物や野菜などを出したりもしていました。と同時に、それらの実践と並行して、施設の運営方針や授産作業を研究したり、職員の採用試験をしたり、職場の規程を作ったりと、施設開設に向けた諸々の業務を行いました。現在、僕の片腕となって現場を統括してくれている法人本部の福原さんは、この作業所開設の新聞記事を見て、ボランティアをしたいと電話をかけてきたのが出会いのきっかけです。僕は施設を退職して無収入となりました。それで、夜の9時から夜中の2時までの生協の仕分け作業のバイトをしながらわずかなバイト料で生計を立てていました。今では懐かしい思い出です。

## **8. 鞍手ゆたかの里の開設**

平成3年度、僕は、小規模作業所を運営しながら、設計士と建物の設計について詳細の打合せと建設自己資金作りに奔走しました。建設自己資金は、最終的には、父の退職金からの寄付金、実家を担保にした銀行借入金、社会福祉医療事業団からの借入金で、合計8千万円を調達し賄いました。5500万円の借入金は、現在もコツコツと返済中で、約半分に減りました。新しい施設の施設長は、鈴木先生にお願いしました。鈴木先生は、小学校の先生を定年退職して5年が経っていました。教員時代は、特殊学級の担任をしていた時代が十数年あり、とても障害児教育に熱心な先生でした。退職後は、直方市社会福祉協議会の副会長や直方市ボランティア連絡協議会の会長など、福祉活動を積極的にされていました。障がい者福祉の面では、地域のリーダー的存在で、気さくで陽気な鈴木先生は、子どもたちや親御さんから絶大の信頼を得ていました。僕は、施設建設を思い立ったときから、施設長は鈴木先生にお願いしようとひそかに考えていたので、認可の内示が下りるとすぐ、先生にお会いし、どんな施設を創りたいかなど夢を語り、「是非、施設長を引き受けて下さい!」とお願いしました。すると、先生は、「私で良ければ力になりますよ」と快く引き受けて下さいました。こうして、施設長は鈴木先生、事務長が僕、主任指導員が福原さんと最強のトライアングルが決まりました。法人認可にあたって理事会を組織する必要性がありました。理事長が父、理事は、鞍手郡4町の各手をつなぐ親の会会長4名、地域の代表の地元区長藤山さん、施設長の鈴木先生、そして会社を営ん

ている僕の叔父です。理事は、以上の8名でスタートしました。

秋には、職員採用試験を行いました。指導員は福祉に関する専門試験、調理員は栄養・調理に関する専門試験、そして小論文と面接。指導員は、約30名の応募者の中から採用者は2名、調理員は、20名の中から2名が採用決定しました。

ゆたかの里は、施設長の鈴木先生、事務長の僕、主任指導員の福原さん、指導員の佐々木さんと小柳さん、調理員平山さんと森川さんの合計7名のスタッフでのスタートでした。この7名のチームワークと情熱が、今の鞍手ゆたか福社会の基礎を創りました。今思っても、みんなしっかりしていて、明るくて、前向きで、ひたむきで、最高のメンバーが集まったよなあ〜と実感します。ケンケンガクガクの議論をしたり、夜中まで残ってみんなで授産の仕事をしたりと、きつかったけど本当に充実した楽しい毎日でした。今思えば、右も左もわからないような若くて未熟な者同士が、利用者のために一生懸命に頑張る姿、しみじみ懐かしく思い出します。

ちなみに、鈴木先生は、5年後に70歳を迎え、後進に道を譲りたいと施設長を勇退され、私と交替しました。当法人の基礎を創って下さった鈴木先生は、評議員として、現在も当法人を支えて下さっています。この頃の様子は創立10周年記念座談会に書かれています。